

妹JKチアガールのおちんぽ応援♪
「おちんぽ頑張れ♪おちんぽ頑張れ～♪」

美夏 「おっはよ——！！ お兄ちゃん！！ 今日もいい
天気で絶好の登校日和だね——！」

美夏 「今日も一日元気にいこう——……って、お兄ちゃん？
まだ布団の中で寝てるの？」

美夏 「んもう……学園の先生なのに教え子より起きるのが
遅いなんてダメだよ？」

美夏 「そんな寝坊助さんには……ってりゃ——！」

美夏 「あはははは！！ お兄ちゃんったら、グエッ！
だって♪ ひかれたカエルみたいで面白い♪」

美夏 「ねえ、嬉しい？ 嬉しい？ えへへ♪ こうんな
元気で可愛い☆に起こしてもらえるんだもん♪
嬉しいに決まってるよね♪」

美夏 「おばさんからも、お兄ちゃんは寝坊助さんだから、
起こしてやってくれって言われてるんだから♪
これから毎日起こしてあ・げ・る♪」

美夏 「（小声で独り言を呟くように）それに、お兄ちゃんの
朝一番の寝顔がみられるし……誰よりも先にお
兄ちゃんとお話したいし……」

美夏 「……ふえ！？ あ、い、いや、何でもないよ！
うん、何でもないから気にしないで！」

美夏

「って、あ、ちょっ！ お兄ちゃん！ 今お布団に戻ろうとしてるでしょ！ ああ！ 待って待って！ せっかくチア部の朝練前に起こしに来てあげたのに！ って、ちょ、ちよっと！ 本当にお布団被らないでよ」

美夏

「む、今日はなんだかいつもより強情だなあ……機嫌が悪いのかも……って、あれ？」

美夏

「机の上、紙があんなにいっぱい……普段はパソコンでお仕事してるはずなのに……」

美夏

「そういえば昨日お兄ちゃんの担当教科でテストがあつて……ってもしかして」

美夏

「お兄ちゃん、昨日の夜遅くまでテストの採点してくれてたの？ それで今日はこんなにおねむさんなの？」

美夏

「はぁ……んもう、それならそうと言ってくれればいいのに」

美夏

「お兄ちゃんは昔っから周りに隠し事すぎだよ」

美夏

「本当は誰よりも真面目で努力家で、人一倍頑張る素敵な人なのに誰にもその姿を見せようとしなんだから」

美夏 「むうゝもつと承認欲求があってもいいと思うんだ
けどなあ」

美夏 「ん、なら、他の人の代わりにあたしがいっぱい、
いゝゝっぱい、良し良しって褒めてあげるね」

美夏 「お兄ちゃん……夜遅くまであたしたち教え子の為
に、いっぱいお仕事してくれてありがとうね」

美夏 「よしよし、えらゝいえらゝい♪」

美夏 「なでなでゝ♪ なでなでゝ♪ あははっ♪ お兄
ちゃん、気持ちよさそうにもぞもぞして……なん
だかちっちゃな男の子になったみたいで、可愛い
♪」

美夏 「頑張ったお兄ちゃん先生にはゝ、あたしから特別
に、ご褒美をあげちゃいます♪」

美夏 「んゝゝ……っちゅ♪ ちゅっ……ん、ちゅっ♪」

美夏 「えへへゝ、頬っぺたにちゅゝしちゃった♪」

美夏 「あはっ、お兄ちゃんのお顔真っ赤♪ 目を閉じて
ても恥ずかしがってるの丸分かりだよ？ えへへ
♪ 可愛い♪」

美夏 「（小声で独り言を呟くように）ってあたしもきつと
顔真っ赤になってるんだろうなあ……ううゝ顔熱
くなってきたて恥ずかしいい」

美夏

「(小声で独り言を呟くように)でも、何だか今いい感じの雰囲気だし……せっかくのチャンスだもん、もっと大胆に……」

美夏

「ほっぺの次は、お耳にもキス……してあげるね♪」

美夏

「……んっ……ちゅっ……ちゅぱっ……ちゅっ……んっ……んちゅっ……れる、ちゅっ♪」

美夏

「ちゅっ……ん、ちゅッ、ちゅっ、ちゅぷ♪
すうううう、ふうううう……はあ、ん、
ちゅ♪ れるっ、はあ、えらい、えらい、
ちゅっ……頑張ってるお兄ちゃん、とっても素敵だよ」

美夏

「……ちゅっ……ちゅぷっ……ちゅっ……ちゅっ……ん——ちゅっ……ちゅっ……はあ……ちゅぷっ……ちゅっ……」

美夏

「ん……ぷはっ……はあ、んっ……今度は、お耳に舌を入れるようにして……」

美夏

「はあむっ、れろっ……んんっ、れろれろ……くちゅ、んん、ちゅぷっ、れるっ……くちゅ……れるれる、じゅっ……ぢゅぷっ……」

美夏

「れろっ……れろれろ……ちゅっ♪ どう？ お兄ちゃん、気持ちいい？ んーちゅ♪ いっぱい頑張ってるお兄ちゃんへのご褒美なんだから……お耳ご奉仕、堪能して♪」

美夏

「……れろっ……んっ、れろれろ……くちゅ、ん、れろっ……おにいひゃん、んっ……くちゅ……れろっ、ちゅっ……ちゅくっ……」

美夏

「……おにーちゃんのお耳……おいしい……れろっ、くちゅっ……れろれろっ……れろっ……ちゅっ……」

美夏

「毎日毎日、んっ……ちゅっ……授業頑張ってくれて、ありがとうね……れろっ……ちゅぷ……ちゅっ、ちゅっ……」

美夏

「……はあ……んっ……んぷっ……ちゅっ、れろっ、れろれろっ……ちゅっ……んぷっ……ちゅっ……くちゅっ、れろっ……んーちゅっ……」

美夏

「ん、んっ！ ぷはっ……はあ、はあ……ふふ♪ お兄ちゃんったらもじもじしちゃって♪ 感じちゃってるの？ 先生なのに、お兄ちゃんなのに♪ 教え子にお耳れろれろされて囁かれちゃって、気持ちよくなってるのお？」

美夏

「ほーら♪ いつまでもそっぽ向いてないで、こっち見て♪」

美夏 「お兄ちゃんはずいねー、がんばったねー、えら
い、えらーい♪」

美夏 「んっ、あんっ♪ お兄ちゃんのお鼻が、あたしの
胸の先っぽ……乳首に当たってえ」

美夏 「あっ、やつ！ ひゃんっ♪ あうう……これ、だ
めえ♪ 乳首刺激されて変な気分になってきやつ
たよう……」

美夏 「……ん？ って、あれ？ お兄ちゃん？ なんか
足に硬いのが当たってるんだけど……」

美夏 「もしかして、お兄ちゃん……おちんぽ、おつきく
なってる？」

美夏 「え、え？ お兄ちゃんったら、教え子のおっぱい
でおちんぽおつきくなっちゃったの？」

美夏 「（小声で独り言を呟くように）や、やったやった！
お兄ちゃん、あたしの事女の子として意識して
くれてるんだー！」

美夏 「（小声で独り言を呟くように）恥ずかしかったけ
ど、お胸ぎゅうううってやってよかった♪」

美夏 「（小声で独り言を呟くように）それなら、この調子
で……」

美夏 「ねえ、お兄ちゃん。おちんぼこのままだとお仕事にも行けないし、辛いよね？」

美夏 「だから、ね？ 責任をもってあたしがお兄ちゃんのおちんぼ気持ちよくぴゅっぴゅしてあげる♪ それ♪」

美夏 「わあ、お兄ちゃんのおちんぼ、最後に見たのは随分昔だけど、あの頃よりすっごく大きくて、大人の男の人って感じがするよ……」

美夏 「先っぽも真っ赤に膨れてて、とっても辛そう……お兄ちゃん、すぐ楽にしてあげるからね？」

美夏 「ん、おちんぼ……このまま手で触って……ひやわっ！？ わっ、わわっ！！ これ、すっごく熱くて、硬くて、たくましい……♪」

美夏 「でも先っぽはぶにっとしてて柔らかくて……本当に不思議」

美夏 「あ、おちんぼの先から何か出てきた……もしかして、これが我慢汁？」

美夏 「えへへ♪ これってあたしの手で触られるのが気持ち良かったってことだね？」

美夏 「んもう……おっぱいに顔埋めて隠れちゃっても、お兄ちゃんのおちんぼ見れば気持ちいいのバレバシなんだから♪」

美夏 「このままいっぱいシコシコして、ぴゅっぴゅっ
させてあげるね♪」

美夏 「ん、こういう感じでいいのかな」

美夏 「おちんぼの根本の方から先っぽの方に向かって、
しーこしーこっ、しーこしーこっ♪」

美夏 「わー、すっごいびくびくして気持ちよさそう♪」

美夏 「もっとしてあげるね。それ♪ しーこしーこ
しーこしーこ♪ しーこしーこ♪ しーこしー
こ♪」

美夏 「先っぽの段差になってるところも、しこしこ
し♪ こすこすこすこすう♪」

美夏 「あんっ♪ ちょっとこすこすただけでビクビク
震えちゃって♪ お兄ちゃんって敏感さんなの
かな？ とっても可愛い♪」

美夏 「えへへ♪ 寝不足でもおちんぽ元気に勃起させ
て偉いでちゅね♪」

美夏 「ほーら、しこしこしこしこしこしこし、しこし
しこしこしこしこし」

美夏 「しこしこしこしこし♪ しこしこしこしこし♪ こす
こすこすこす♪ こすこすこすこすこす♪」

美夏

「うゝん、おちんぼ気持ちよさそうにしてるけど、
射精するにはまだちょっと刺激が足りないのかな
……」

美夏

「あ、そうだ！ それなら、おちんぼしこしこしな
がらお兄ちゃんのお耳に失礼して……」

美夏

「んっ、くちゅっ……れるっ、くちゅぴちゅっ……
……ちゅっ……んちゅっ……れるっ……れるれろっ
……んゝちゅっ……ちゅぱっ……んっ……れるっ
……くちゅ……」

美夏

「はむ、んっ……おにいひゃん……じゅるっ……
ちゅ……ちゅう……んちゅっ……れるれる……
じゅるっ、ぢゅぶぶっ……れる、んちゅっ♪」

美夏

「ちゅっ……ちゅっ、ちゅううう、ちゅぱっ……
はあ、はふう♪ えへへ、おちんぼシコシコとお
耳ペロペロの同時責め……んゝちゅっ♪ 気持ち
いいでしょ？ ちゅっ……れるおっ……れるれろ
……ちゅっ、ちゅるっ……んっ……じゅるっ」

美夏

「もっと……んっ、ちゅっ……くちゅっ……じゅ
るっ……ちゅっ……ちゅぱっ……はあ……はあ……
……激しく……すりゆね……ふう……スウー
———」

美夏

「ぶっ！　じゅぶぶっ……！　ぴちゅ、くちゅ……！　んっ！　はあ……んっ……はあ……れるろ……んっ……くちゅ……！　じゅぶぶっ……じゅっ、れちゅっ！　れるれるれる……ぐちゅ、ぴちゅ……！　ふああ……んちゅっ……れるろ……！」

美夏

「ぴちゅくちゅ……！　ん……！　ふうう……！　じゅぶぶっ……！　ぴちゅくちゅ……！　ふふっ♪　れるろ……！　ぴちゅ……！　れろっ……じゅりゅっ……！」

美夏

「んゝぷはっ……はあ、はあ……お兄ちゃん、おちんぽもう我慢できなさそう？」

美夏

「いいよ♪　あたしのお手手の中に、朝一番のお兄ちゃんミルク、いっぱいぴゅっぴゅしちやお♪」

美夏

「それ♪　しーこしこしこしこしこしこしこし、しこしこしこしこしこし♪」

美夏

「おちんぽしこしこし　おちんぽしこしこしこしこし♪」

美夏

「ほら、お兄ちゃん♪　頑張れ頑張れ♪　おちんぽ頑張れ頑張れ♪」

美夏

「おちんぽにたまった精液、疲れと一緒に沢山ぴゅっぴゅしちやえ♪」

美夏

「それそれ♪ お兄ちゃん、おちんぼぴゅっぴゅ♪
おちんぼぴゅっぴゅ♪ お手手おまんこでおち
んぼぴゅっつっぴゅうううううううう
うう!!」

美夏

「あっ、きやあっ♪ お兄ちゃんのおちんぼから精
液いっぱい出て……! わ、わっ! ちよっ!
凄い! こんな勢い強いなんて! あ、やあ!
ダメエ! お手手から溢れる! おちんぼミルク
溢れちゃうのお!!」

美夏

「あっ、んっ! やっ! ダメ! お兄ちゃん、我
慢しちゃダメだからね! あたしの事なんて気に
しないで、このまま全部出してえ! おちんぼ遠
慮なく気持ちよくなつてえ!」

美夏

「ほら、ぴゅっぴゅ♪ ぴゅっぴゅ♪ ぴゅっぴゅ
っ、ぴゅっぴゅっ、びゅるびゅる、びゅるる
るううううううう♪」

美夏

「えへへ、すっごく沢山出してくれたね♪ 男の人
が射精するところなんて初めて見たけど、こんな
に凄いんだ」

美夏

「どう、かな? これで少しは元気になってくれ
た?」

美夏

「あたしは、お兄ちゃんが実はすっごく努力家で頑
張り屋さんなことを知ってるから」

美夏 「だからもし頑張りすぎて疲れちゃった時は、遠慮なくあたしに甘えてくれていいんだからね♪」

美夏 「元気いっぱいになれるように、あたしがいっぱい励ましてあげるんだから!!」

美夏 「(小声で独り言を呟くように)それに、あたしの胸に甘えてきてくれるお兄ちゃん、すっごく可愛かったし……また見たいな……お兄ちゃんの可愛いがた♪」

美夏 「えへへ、ううん、何でもないよ♪」

美夏 「ほら、もうすっきりしたんだし、いい加減起きよ。じゃないと」飯食べる時間がなくなっちゃう」

美夏 「さ、今日も楽しい一日にしようね、お兄ちゃん!!」

◆トラップ02

美夏 「うわっ、やっぱり屋上は風が強いな」

美夏 「って、あ——!! お兄ちゃんったら、職員室にいないと思ったらやっぱりこんな所にいた!!」

美夏 「んもう、何でいつもいつもお昼休みになったらどっかいつちゃうのかな？」

美夏 「この前は体育館裏、さらにその前はグラウンド端の木の下……毎回探し回るあたしの事も考えてよね」

美夏 「え？ いつも職員室まで来て大きな声で喚きちらすうるさい奴のせい……って、まさかそれ、あたしのこと！？」

美夏 「そんな言い方ってないでしょ！？ 貴重なお昼休みを使っていつも一人寂しくお弁当を食べてるお兄ちゃんの為にあたしという美少女が華を添えてあげてるんだから！」

美夏 「ここはむしろ感謝してしかるべきだと思うんだよね？ ね？」

美夏 「ああゝ！ そんな露骨に嫌そうな顔してゝ！」

美夏 「いいもん！ お兄ちゃんがどこに逃げたって、あたしが絶対追いかけて」

美夏 「ん？ そんな」とどうでもいいから要件はなんだって？」

美夏 「むむむゝ、せっかくお兄ちゃんにいいこと教えてあげようと思って探しに来たのに……」

美夏 「あれ？ お兄ちゃんったら黙っちゃって……もしかして、良いことゝが何か気になっちゃってる？」

美夏 「えっへへ、どうしよっかな、お兄ちゃんはあるが話しに来るのが鬱陶しいんだよね？」

美夏 「あたしはお兄ちゃんには甘々で優しいからお兄ちゃんの言う通り邪魔にならないようこのまま教室に帰っちゃおうかな？」 ちら、ちら♪

美夏 「って、あ、あれ？ お、お兄ちゃん？ そ、そんな怖い顔して近づいてきて……」

美夏 「あのう、ご、ごめんね？ ちょっつと調子に乗っちゃっただけでおちゃめなジョークだったの……そ、そう！ 美少女の小粋なジョークだよ、じよ・う・く♪」

美夏 「何があったかきちんと教えてあげるから、ね？ ね？ だからさ、一旦落ち着こ？ ほら可愛い教え子に免じて、ね……？」

美夏 「うっ！ うにやあああ！ うにやうにや！ お、お兄ちゃん！ 頭ワシヤワシヤやめてやめて！ セットした髪の毛くしゃくしゃになっちゃうってからあ！」

美夏 「ばかばかばか！ 乙女の髪の毛を何だと思ってるのさ！！ バカお兄ちゃん！！」

美夏 「う、んもう……毛先とかはねまくっちゃって……あうう……お兄ちゃん意地悪だよう……」

美夏 「はあゝ……なんか意地悪された後にこんなこというのも癪ではあるんだけど……」

美夏 「あのね、今日お兄ちゃんの授業があたしのクラスであつたでしょ？」

美夏 「それで友達が今日の授業範囲を塾で先取りしてたらしいんだけど、塾のベテラン先生なんかよりお兄ちゃんの授業の方がすごく分かりやすく素敵な授業だったんだって!!」

美夏 「ふふふゝ♪ どう？ 嬉しい？ 嬉しい？」

美夏 「えへへゝ♪ お兄ちゃんったら少し口元がにやけてるねゝ♪ あたしも嬉しくなってきたちゃうよお♪」

美夏 「だってお兄ちゃんったら、いつもぶっきらぼうな顔してるせいでみんな話しかけづらそうにしてるけど、お兄ちゃんが毎日頑張って生徒の為に沢山授業の準備をしてくれてる事、分かってるんだからね？」

美夏 「お兄ちゃんはおっと褒められて当然の、あたしが大好きな自慢のお兄ちゃんだから♪」

美夏 「そのことをクラスの皆もだんだん分かってきてくれて、嬉しくなっちゃうの♪」

美夏

「（小声で独り言を呟くように）でもあたしだけが知ってたお兄ちゃんの素敵な所を独占できなくなっちゃうのは、ちよつと寂しいんだけどね……」

美夏

「ん？ あれ？ お兄ちゃん？ そんな固まってどうしたの？」

美夏

「え？ あたしが、お兄ちゃんのこと大好きって……言っただけ……」

美夏

「……ふ、ふにや、ふにやあああああああああああ……」

美夏

「あつ、えつ、あつ……そ、それは！ 言葉のあやっぴいとか、は、話の流れでポロっと出ちゃった、みたいな……」

美夏

「そ、その！ お兄ちゃんとして大好き！ というか……あつ、いやつ、それも違わなくはないんだけど、ちよつと違うっていうか、もっと深い意味合いついていうかあ……うっ！ ううっ！ あううう……」

美夏

「（小声でもじもじしながら恥ずかしがるように）そ、そうだよ……話のはずみで言っちゃったけど、あたし、お兄ちゃんのこと大好きだよ……」

美夏

「もちろん、大切な隣のお兄ちゃんとしても大好きだけど」

美夏 「小さい頃から、すぐ傍でいっぱい頑張ってる姿を見てきたもん！」

美夏 「あたしがこの学園を受験したのも、お兄ちゃんがここに赴任するって知ったからだし、チア部に入ったのもお兄ちゃんが顧問してるからで……そ、それに！　頑張ってるお兄ちゃんを可愛い衣装で応援してあげて、元気になってほしいって思ったからだもん！」

美夏 「だから、だから！！　あたしは！　お兄ちゃんのこと、一人の男の人として、ずっと前から、だい！　だいっ！！　だ〜い好きだよ！！！」

美夏 「（小声でもじもじしながら恥ずかしがるように）うううううう〜もう、何でこうなっちゃったのかな〜……」

美夏 「（小声でもじもじしながら恥ずかしがるように）本当ならもっとロマンチックなタイミングで告白するつもりだったのに……失敗しちゃったよう……」

美夏 「ふえっ、わ！　お、お兄ちゃん！？　そんな急に抱きしめられると……」

美夏 「あ、ダ、ダメ！！　今あたし顔真っ赤で……それに流れで告白までしちゃって……こんな恥ずかしい顔お兄ちゃんに見られたくない……」

美夏 「え？ ちょっ、お、お兄ちゃん！？ 顔もっと
近っ！？ っん、っんんんんん！？！？」

美夏 「あ、んむっ！？ んっ……んちゅっ、ちゅっ、
ぢゅるるっ……くふっ、んうう……ちゅるるっ、
んむっ、ぢゅっ、ちゅぶぶぶっ……！」

美夏 「んっ！ んんっ！！ んぢゅっ！ ぶはっ！
きゃ！ やっ！ お、おにい、ひゃんっ……あ
ぷっ！ んっく、んむ、ちゅ、じゅるるっ、ぢゅ
ぱ、ぢゅ、ぢゅうううっ」

美夏 「ちゅぱ、ちゅぱ……んじゅ、ちゅ、ちゅう……ぶ
はっ……はあ、はあ」

美夏 「お、お兄ちゃん！ きゅ、急に何するの！！ っ
ていうか何したか分かってるの！！」

美夏 「こ、これ……だ、だって！ そのう……キ、キス
……だよ……？ しかも恋人がするようなエッ
ちなやつ……」

美夏 「あう、あううう……今までどれだけ一緒にいて
も、どれだけお兄ちゃんに好き好きアピールして
もそっけなかったのに、何で急に……」

美夏 「も、もしかして……お兄ちゃんもあたしの事好き
でいてくれたの？ あたしの事妹じゃなくて女の
子として見てくれてたの？」

美夏 「今朝も本当は眠ただけじゃなくって、あたしの事女の子として意識したから布団に隠れちゃった……とか？」

美夏 「むううう————！ んもう！ もうもうもう——！」

美夏 「お兄ちゃんのバカバカバカバカア——！ あたしは、ずっと前からお兄ちゃんの事、好きで、好きで、だ——い好きで——！」

美夏 「ずっと、ずっと、あたしの事女の子として見てもらえるように頑張ってたんだから！」

美夏 「先生と生徒なんて関係ない——！ 兄と妹みたいな関係だって関係ない——！ あたしは！ 先生であってお兄ちゃんのあなたが、世界の誰よりも好きなの——！」

美夏 「んもう！ これからは絶対にあたしから目を逸らさせないし逃がさないんだから——！ んっ！ はむっ——！」

美夏 「んんっ、んっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅぷっ……んちゅ……ちゅうう、んちゅるっ……——！」

美夏 「んじゅっ、ちゅう、ちゅっ……じゅるるっ……ぷああっ、はああんっ……——！」

美夏

「ちゅぷっ！　ちゅっ、ちゅぷっ……はむっ、好き……しゅきい……んむっ、じゅっ、じゅるる……んむっ、れる、ちゅ、んちゅっ、ちゅうううう……っ……じゅっ、ちゅっ……」

美夏

「ぷああ……はっ、はふう……お兄ちゃん……好き、好きだよ……ずっと、子供のころから好きだったの……」

美夏

「あたしの為にどんな無茶なことしてくれて、優しく、たくましくて……」

美夏

「きっと、この先お兄ちゃん以上に素敵な人なんていないだろうって確信できるの……」

美夏

「だから……スキ、スキスキスキ……大好きい♪」

美夏

「ねえお兄ちゃん……もっとキスしよ？　んっ……ちゅっ♪　ちゅぷっ……ちゅっ……ちゅっ……んー……ちゅっ……ちゅっ……はあ……ちゅぷっ……ちゅっ……」

美夏

「……んちゅ、くちゅ……んんっ……れるろ……くちゅ……んふっ……はあ……ちゅむっ……くちゅ……んちゅっ……ちゅぷっ、くちゅ……」

美夏

「んむう、んっ、ちゅるう……お兄ひゃんとのキス……ずっと憧れてたきしゅ……んぢゅっ、ちゅっ……ふわあ……気持ちいいよう……」

美夏

「んっ、ちゅ、ちゅっ、ちゅ♪　ちゅぶっ！
ちゅ、はむっ、ちゅ、ぢゅぶっ、ちゅぶぶっ……
ん、んんっ！　んっ……れるっ、れるれるろ…
…じゅぶぶっ！　ちゅぶっ、ぶはっ！　はあ、
はあ……」

美夏

「お、おにひゃんの、きしゅ……激しくて……
あっ……ちゅっ♪　ちゅ、ちゅぶ、んちゅ……は
ぶっ、んむっ……ちゅ、ぢゅぶっ、んんちゅ
うううう……」

美夏

「んぱっ、ふわあ……！？　あっ、ひゃんっ！
やっ、お兄ちゃん、そんなに強くあたしの事抱き
しめちゃ……」

美夏

「はううう……あったかい♪　あたしの事、いつ
ぱい求めてくれてるのが分かるよう……」

美夏

「お兄ちゃ〜ん♪　もっと、もっとキス……♪　は
むっ……」

美夏

「ちゅ、くちゅ……んんっ……れる……くちゅ……
んふっ……しゅきい……ちゅむっ……くちゅ……
んちゅっ……しゅき、しゅきしゅきい……大しゅ
きい……ちゅぶっ、くちゅ……」

美夏

「……ちゅぶっ……くちゅ……ちゅっ……はあ……
くちゅ……んふっ……れるっ……ちゅぶっ、お願
い……睡、もっろ飲ませてえ……♪　大人のエツ
チなきしゅいつふあいしてえ……♪」

美夏

「……んっ！ んんっ！ んちゅっ……！ くちゅちゅぷっ……れろれる……！ はああん……んんっ……くちゅちゅぷっ……！ 大人のきしゅ、気持ちいい……♪ んちゅっ、ちゅう……！」

美夏

「……好きっ……おにーちゃん、大好きい……ちゅぷっ、ちゅ……♪ んん……！ んぷっ……ちゅ、ちゅぷっ……！ あむっ、ちゅ……れろ、れろれる……ちゅぷっ……」

美夏

「ん、ちゅっ……ぷはっ……はあ、はあ……お兄ちゃん……あのう、その、ね？ 大きい、その……おちんぽ……当たってるよ？」

美夏

「もう、お兄ちゃんのエッチ♪」

美夏

「でも……あたしもやっとお兄ちゃんに気持ちを伝えられて……両想いになれて……これ以上我慢なんてできないよお」

美夏

「だから、ね？ お兄ちゃん、このまま、エッチ、しよ？」

美夏

「あたしの大切なこ……お、おまんこも、今のキスでいっぱい濡れちゃって……トロトロに蕩けちゃってるの……」

美夏

「だからね？ お兄ちゃん……お兄ちゃんのおつきくて遅いおちんぽで……あたしの……美夏の初めてを奪ってえ？」

美夏 「あ、お兄ちゃんのおちんぽ、びくびくしてるの、分かるよ……♪」

美夏 「うん……お兄ちゃん……このまま……きて……♪
んっ……あっ……来る……おちんぽきちゃう♪
はぁ……あっ♪」

美夏 「ひゃっ！ わっ！ わっ！……わっ！……あ、あれ！？ 何で！！ って、あぁー！！ そうだよ！ 今昼休みだったの忘れてたよ！！！」

美夏 「あぁんもう！！ 告白も流れに任せちゃったし、初エッチもタイミング逃しちゃったし……はううう……散々だよ……」

美夏 「ひゃわわ！？ お、お兄ちゃん、また抱きしめたりなんかして……うう……あたしも初エッチする気満々で、おまんこもお漏らししちゃったみたいに濡れちゃって……我慢なんてできないよう……でもお兄ちゃんはこの後授業があるし……さすがに戻らないとだし……うう……」

美夏 「ふえ？ 放課後チア部の活動後に体育用具室に来て……えっ、そ、それってもしかして……！！？」

美夏

「うん、うん！ 分かったよ！ 部活が終わるまで
あたしも我慢する！！ きっと期待してパンツび
ちよびちよになっちゃうと思うけど……我慢した
後の方がエッチは気持ちいいっていうもん
ね！！」

美夏

「お兄ちゃんも部活が終わるまでおちんぽ一人でシ
コシコしちゃダメだからね！！」

美夏

「絶対だよ？ 約束だからね？」

◆トラック〇〇

美夏

「はい！！ 今日の練習はそこまで！！」

美夏

「はあ、はあ……んっ、みんなすっごい元気で良
かったよ……」

美夏

「んっ……それじゃ、あっ♪ んん……マットとか
ポンポンとか、残りのお片付けは、あっ……
はあっ、んっ……♪ あたしと先生がやっておく
から……皆は、先に上がっていい、よ♪」

美夏

「ふえ！？ あ、あはは……私？ えへへ、平気平
気♪ んっ、ちよっと疲れちゃっただけだから」

美夏

「部長として個人的に先生と〓人つきりで相談したい
こともあるからさ、はあ……あっ……んっ、ほ、
ほんと平気だから……ほらほら、いっていいって」

美夏

「はあ、はあ……行った……かな？」

美夏

「うん、大丈夫そう、だね」

美夏

「そ、それじゃ！ お兄ちゃん！！ 早く、こっち
こっち！！」

美夏

「お兄ちゃん！！」

美夏

「んぷっ……ちゅっ、ちゅう、ちゅっ……んちゅっ
……ぷああっ、はうんっ……」

美夏

「お兄ちゃん……お兄ちゃん……もっとキスっ、
キスっ、してえ……♪」

美夏

「んじゅっ、ちゅっ、ちゅっ……じゅるる……はあ
んむっ、ちゅう、んちゅう……じゅっ、
ちゅっ……」

美夏

「ぷああ……はっ、はふう……お兄ひゃんとのキ
スっ、気持ちよしゆぎて……止められないよう……
……」

美夏

「もっろ……もっろ激ひく……あむ……んっ！
くちゅ、んぷう……！！」

美夏

「はふっ……！ くちゅっ、じゅるるうっ……！
はあっ……！ ねぷっ、んむうう！！」

美夏

「あ、やんっ……♪ んんうっ、はぷっ！ うう……
……ちゅっ……おにいひゃん……あたしのおっぱい
も触ってえ……んっ……あんっ！！」

美夏

「あむっ……！ くちゅっ、んむうっ……お兄ちゃんの手が、チアの衣装の下から入ってきて……れろっ、ちゅぱあっ！ あうう……お兄ちゃんの大きな手……おっぱい揉みしだいてえ♪」

美夏

「ひゃうっ……んぷう、むぶぷうっ……！　じゅるっ、じゅるるっ……！　じゅぶぶっ……ぷはっ！　んああ♪　おっぱい触られながらのきしゅ……しゅきい……」

美夏

「はあ、はあ……あっ、やつ、んああっ！　はむうっ！　ちゅっ、れろっ……れろれろ……お、おにいひゃん♪　乳首もお……♪　あたしのエツチな勃起乳首もいっぱい触ってえ♪」

美夏

「あっ、ああん！！　ら、らめえ……これしゅごいい！　んああっ！　乳首いい！　あ、やつ！　ん、んんっ……！　ちゅっ、ちゅぱっ……！」

美夏

「らめえ♪　おっぱい揉まれるだけで、気持ちよしゅぎてえ……！　馬鹿になっちゃう、おバカになっちゃうよう……♪　んむうう……！　んあっ♪　やつ、あ、あ、ああ！　はぶっ！　じゅぷっ！　れろっ、れろれろっ、じゅじゅっ……！……！」

美夏

「れるっ！　じゅぶっ……ちゅぶぶっ……れろ、じゅりゅっ！　れろれろれろ……んっ……ちゅぱあっ！」

美夏

「はあ、ああんっ……お兄ちゃん？ どうしてキスやめちゃうの……って、え？ 腕を上げて欲しいって……こ、こうかな？ って、ふあっ！？ お、お兄ちゃん！？」

美夏

「あ、だ、ダメ！ あたしの脇に顔近づけちゃだめえ！！ 今すっごく汗かいてるしシャワーもまだ浴びてないから！！ 絶対匂うから！！ 臭いからあ！」

美夏

「って、あ、ひゃああっ！ お兄ちゃん……そんな……お鼻ならしながら嗅がないでえ……あたしの汗だくの脇嗅がないでえ……」

美夏

「ふえ？ 甘酸っぱくて、むわっってして……ずっと嗅いでいたい……って！」

美夏

「い、いや！ いやっ！！ お兄ちゃんのバカ！！ エッチ！！ 変態！！！！ ど変態！！！！！」

美夏

「そんな感想誰も求めてないっ！！ ……て、ひゃわわわわっ！？」

美夏

「こ、これっ！ 脇舐められて……あんっ！ やっ！ くすぐったい……！ ひゃっ！ んあ、あ、あああああ……！」

美夏

「いやあ！ お兄ちゃんの舌、あたしの脇をペロペロしてえ……ひうっ！？ 脇汗、舐めないでえ……ちゅうちゅう吸わないでえ……♪」

美夏

「んあっ！ やっ、はあ、はあ……んあっ、汗だくの脇を……そんなっ、ワンちゃんみたいに必死に舐めるなんてえ……あうんっ！」

美夏

「あ、やんっ！ ひやっ！ んああ！ おっぱいと脇い……ねっとり舐められちゃ……あううっ、敏感になって……鳥肌立っちゃうう」

美夏

「はふっ、くっ、んんっ！！ ダメッ……こんなのダメ……ダメなのに……お兄ちゃんに脇ぺろぺろされるの……気持ちいいのお……♪」

美夏

「んひやっ！ はあ、あっ、あんっ♪ んああ♪ 気持ちいい♪ 脇からお兄ちゃんの熱感じられて……くすぐったくてえ♪ ねえ、お兄ちゃん……♪ もっとぺろぺろしてえ♪ あたしのエッチでスケベな脇、もっと愛してえ♪」

美夏

「あっ、ふわあっ！ 脇の奥う♪ お肉とお肉の間ほじられてえ♪ ペろペろされてえ♪ いいよおお♪」

美夏

「あたしの、くっさい濃厚でエッチな脇汗え……ぐちゅぐちゅになるまで、いっぱい舐めてえ♪ もっともろっと気持ちよくしてえ♪」

美夏

「んあっ、ひやっ！ ああん！ お兄ちゃんの舌あ！ もっと激しくなってえ！ んあっ、あ、あたし、感じすぎて、おまんこからお汁止まらないうう……♪」

美夏

「はううつ♪ いいのっ!! 脇舐められるのいい
のお……♪ お兄ちゃん、お兄ちゃんっ! お兄
ちゃああああん!!」

美夏

「はあっ、はうん! ふあっ、はあ、あああっ!!
そんな、脇舐めながらおっぱいも……あ、ひ
ああんっ! これっ、もうだめ! だめえええ
え!!」

美夏

「はあん、くるっ……もうきちやうう! ん
はっ、あああんっ、これっ、もうイクツ! 気持
ちよすぎて、あっ、あっ、イツちやうのお
お!!」

美夏

「ふわああっ、イクツ! イクウツ! んあああ
あ!! おにいひゃん、もうダメええ、脇と乳首
いじめられちゃっ! これっ! オマンコツ、イ
グッ、イグイグッ、イっぐううううう
ううっ!!」

美夏

「んっひやあああああああああ!!」

美夏

「あふあああああっ、やあ! これ、ダメエ! 気
持ちよしゆぎておまんこ吹いちゃってえ! おも
らしだめえ!! 止まんないいい!!」

美夏

「あああああっ、んああ、ハアハア、しゅごいい
……脇でこんな気持ちよくイツちやうなんてええ
……はあ、はあ、変態さんだようう……」

美夏

「はうん……はあ、あふう……おまんこからお汁止まんない……パンツがびちよびちよになっちゃって、太ももまで垂れちゃってるよう……」

美夏

「んもう、お兄ちゃんったらあ……まだ脇に顔うずめて……あつ、あんつ、そんな、まだイッたばかりで敏感だからあ、鼻息吹きかけないでえ……」

美夏

「ひやうう、まだおまんこ止まんない……おまんこお……気持ちいいの止まんないよう……」

美夏

「はふつ、はあ、はあ……んつ、ふあああ……お兄ちゃん、もう一回キス、してえ……」

美夏

「んんっ、んっ、ちゅっ、ちゅっ……ぢゅぷっ……んぢゅ……ちゅうう、ちゅっ……♪」

美夏

「あむっ、ちゅっ、ちゅっ……ぢゅっ……じゅりゅ……はあ、んむっ、ちゅっ、ちゅうう、れるっ、ん、ちゅうう……じゅっ、ちゅっ♪」

美夏

「ぶああ……お兄ちゃん、もう我慢できないって顔してる……おちんぽも、力チ力チで、おまんこに押し当てられちゃってるう♪」

美夏

「えへへ、いいよ、お兄ちゃん。あたしも、もう我慢できないもん……」

美夏

「お兄ちゃんの、おつきくて遅しいおちんぽで……美夏の、エッチで厭らしい発情おまんこ、いっぱい犯して……♪ 精液、子宮の奥に沢山びゅーびゅーしてえ……♪」

美夏

「わっ、わっ！お、お兄ちゃん……えへへ、こんな風に押し倒すなんて、お兄ちゃんもすっかり発情してくれてて、あたし嬉しい……」

美夏

「ふあああ、おちんぽ、今まで見たことないくらい勃起してる……先っぽも真っ赤に膨れてて、今にも射精しそうなくらい……」

美夏

「ね、お兄ちゃん……あたしのミニスカの下……さっきの脇舐めとキスでぐちゅぐちゅになってるパンツ……脱がせて♪」

美夏

「はうう……ついに、あたしのおまんこ見せちゃった……♪」

美夏

「ううう……お兄ちゃんの視線を感じるよお……やあ……おもらしたばっかで、すっごい濡れるからあんまりジロジロ見ないでえ……」

美夏

「ほ、ほら！いつまでもおまんこ見てないで、ね？　しょ？　初めてのセックス……♪　あたしの処女おまんこ、お兄ちゃんのおちんぽで奪ってえ♪」

美夏 「あ、お兄ちゃんのおちんぽ、おまんこに来てる……あっ、ああっ！」

美夏 「あっ……はううううンッ!!」

美夏 「んはッ……ああっ、ハッ、ひゃっ！ お、おまんこにい……！ おちんぽお……きったああ！ やっとお、あたしのおまんこ処女っ、お兄ちゃんに捧げられたよう……」

美夏 「んはっ、あうっ……初めては痛いって聞いてたけど……今日一日焦らされたのお……さっきイカされたからか……全然苦しくなくてえ……むしろ、入れられただけでイッちゃうくらい、気持ちいいよう」

美夏 「はあ、はあ……お兄ちゃんはどう？ あたしのおまんこ気持ちいい？」

美夏 「って、お、お兄ちゃん？ おちんぽ入れたまま固まっちゃってどうしたの？」

美夏 「ふえ？ もうダメ？ 我慢できない？ って、え、えっ？ う、嘘……おちんぽ、おまんこの中で震えだして……も、もしかして、え、えっ？ きゃっ、きやあっ!?!」

美夏

「あ、ああ……こ、これ……精液あたしの子宮に流れ込んで……お兄ちゃん、おまんこにおちんぽ入れただけでイっちゃったの？ お兄ちゃんって早漏さんだったの？」

美夏

「あ、わっ、わっ！？ お、お兄ちゃん！ そんなしょんぼりしないで！ 大丈夫、大丈夫だから！！」

美夏

「ううう……今にも泣きそうな顔しちゃって……うう……んもうっ、お兄ちゃん！ ぎゅううううううう！！」

美夏

「ほら、お兄ちゃん、いいこ、いいこ……大丈夫、大丈夫だよ♪」

美夏

「あたしのおまんこで気持ちよくなってくれたんだよね……ならあたしはとっても嬉しいよ♪」

美夏

「だって、お兄ちゃんが我慢できないくらい気持ちよくできたって事だもん♪ それに、初めてのセックスで膣中出しまでしてくれるなんて、幸せすぎておかしくなっちゃいそうだよ♪」

美夏

「だからね？ おまんこにいっぱいぴゅっぴゅしてくれたお兄ちゃんは、えらいえらいなんだよ♪」

美夏

「ほら！！ えらいえらい、おちんぽいっぱいぴゅっぴゅっ出来てえらいね♪」

美夏 「よしよし♪ よしよし♪ よろよしよし♪ よ
ろよしよし♪」

美夏 「あっ……んもう、お兄ちゃんったら♪ ぴゅっ
ぴゅしたばかりなのに、またおまんこの中でおち
んぽ大きくなってきたよ？」

美夏 「えへへ♪ やっぱり、お兄ちゃんのおちんぽはお
りこうさんだね」

美夏 「ほら、このままおまんこぎゅううううって絞っ
てあげるから、もっともーっと、気持ちよくなっ
て……ね♪」

美夏 「あっ、ああああああんっ………！ お兄ちゃんの
おちんぽお……また来たあ………！」

美夏 「んはあああっ……あああっ、はふうんっ！ あ、
あ、あ、んああっ！ ひあっ、ああああっ、ああ
んっ！」

美夏 「はひいんっ！ んんっ、はうんっ………気持ち、い
いよう！ 声我慢できないのお！」

美夏 「お、お兄ちゃん！ あたしのおまんこ、気持ちい
い？ エッチで厭らしいおまんこ、気持ちよく
なってくれてるう？」

美夏

「はあっ、はあ……ん、あっ、ひゃあっ！
んううっ、おちんぽ深いいいっ！　そこお……お
まんこの奥、子宮！　感じちゃうっ！　エッチな
お汁……溢れちゃうよお！」

美夏

「あっ、やあ！　はっ、はっ……お兄ちゃん、腰振
り激しくなってきた……うん、そうだよね♪
あ、あっ……もっと気持ちよくなって、一つになっ
て溶け合いたいもんね♪」

美夏

「はっ、はっ……い、いいよ♪　一つになっちゃお？
　いっぱいおちんぽパンパンしてあたしの全部お
兄ちゃんのものにしちゃっていいよお♪」

美夏

「あ、あんっ、んっ、はあ、はあ、頑張っておちん
ぽパンパンしてくれるお兄ちゃん、素敵だよう…
…♪」

美夏

「んあっ！　あ、あ、あ、あ！　はあ、ふっ！
ふっ！　んにゃっ！？　はあ、やっ……あ、ん
ああああ！…」

美夏

「はふっ！？　はあ、はあ……え、えへ……♪
そんな、必死にエッチしてくれるお兄ちゃんに、
はっ！　ひううんっ！　ああっ、はあ、特別な応
援っ、してあげるね……♪」

美夏

「はあ、はあ……それ♪　フレッ、フレッ、おにい
ちゃん！！　頑張れ、頑張れ、おにいちゃ
ん！！…」

美夏

「えへへっ、ちょうど部活後でチア衣装を着てるんだもん……いっぱい応援してあげるから……んっ、このままおちんぽ頑張って♪」

美夏

「(厭らしく官能的に囁くように)フレッ、フレッ、お・ち・ん・ぽ♪ 頑張れ、頑張れ、お・ち・ん・ぽ♪」

美夏

「(厭らしく官能的に囁くように)負けるな、負けるな、お・ち・ん・ぽ♪ 頑張れ、頑張れ、お・ち・ん・ぽ♪」

美夏

「はひいいいっ……あっ、んはああ……ああっ、お兄ちゃんのおちんぽ、まだ大きくなって……」

美夏

「んひうっ、腰の動きも早くなって！ んあっ！ あうう、お兄ちゃん激しくて気持ちいいよう♪」

美夏

「あ、はひっ！ し、子宮う、思いつきり突かれて……おっぱいも、揺れてえ……！」

美夏

「おまんこもクリも、気持ちいい！ もう全身気持ちよすぎておかしくなりゆのおおおお！！」

美夏

「んんっ、ああああああっ！！ こ、これが、せつくしゆう……！ 大好きな人との、ラブラブせつくしゆううう……！」

美夏 「想像してたのより、はあ、はううっ！　ずっと、
ずっと気持ちよくってえ♪　幸せいっぱいであえ♪
素敵でえ♪」

美夏 「これ好きい！　大好きになっちゃううう！！　エ
ッチ大好きな厭らしいおまんこになっちゃう
よおお！！」

美夏 「お兄ちゃん、お兄ちゃん！　お兄ちゃん！！　お
兄ちゃんああん！！！！　んあああっ！　はう
ううっ！！　あたし、もう耐えられない！！　お
まんこイグう！　このままイッちゃう！　イッ
ちゃうのおお！！」

美夏 「あああっ、なかあ……………！　あたしのおまんこの中
にいつ…………ひゃっ！　ひうううんっ！　はっ、
はあ…………はふううっ、んんっ、とろっとろの発情
おまんこにいい！！」

美夏 「お兄ちゃんのおちんぽミルク、いっぱい出し
てえ！　お兄ちゃんのおちんぽで、あたしのこと
バカにしてえ！！　気持ちよくしてえ！！」

美夏 「あっ！　あっ！　あっ！　あっ！　やあ！　は
ッ！　んあっ、ひゃああっ！　あ、ほんとイク！
ああっ、イッちゃううっ…………おまんこイ
グうううっ！！」

美夏 「おまんこ、イク！　イク！！　イク！！！！　イク
イクイクイク…………！！」

美夏

「ん……そ・れ・にい♪」

美夏

「もし、あたしが孕んじやったら、そのままお兄ちゃんと結婚すればいいだけだもん♪ だから、いつでも生贖中出し、していいよ♪ ね♪ お・に・い・ちゃん♪」

美夏

「えへへ♪ 困った顔してる♪ でも、冗談何かじゃないからね？」

美夏

「お昼休みにも言ったでしょ？ 絶対お兄ちゃんのこととは逃がさないって♪」

美夏

「お兄ちゃんがどこに行っても、絶対追いかけて逃がさないんだから♪」

美夏

「んっ、しょっ、と……それじゃ、あたしもお兄ちゃんも、汗やエッチなお汁でベトベトになっちゃったし、チア部のシャワー室に行って洗い流そっか」

美夏

「ふふっ、せっかくだし、久しぶりにお兄ちゃんの背中、流してあげる♪」

◆トラック04

美夏

「んっ、ひゃああ！ シャワー気持ちいいっ♪」

美夏

「部活で汗かいてそのままセックスで、全身汗とか愛液でドロドロだったし、きちんと綺麗にしないとだもんねえ♪」

美夏

「ほら、お兄ちゃんも今更恥ずかしがってないで
もっとこっち来て？　せつかく人つきりなんだ
し、体洗ってあげるから♪」

美夏

「ん、それじゃあ、シャワーを一旦止めてからボディ
ソープを手に塗って……」

美夏

「うーん、でもせつかく恋人同士になったのに、普
通に洗いっこするのは面白くないなあ……」

美夏

「あ！　そうだ！　えへへ♪　いい事思いつい
ちゃった♪　ん、しょ……ボディソープをおっぱ
いに塗ってえ……えい！」

美夏

「どうどう？　可愛い妹のおっぱいスポンジは？
さっきセックスしてた時に思いっきり揺れてた巨
乳だよ？　ぷにぷにして柔らかいでしょ♪」

美夏

「このままあたしのおっぱいで、お兄ちゃんの胸板
ゴシゴシして綺麗にしてあげるね♪」

美夏

「ん、しょっ……えへへ、おっぱいを、こんな感じ
に、上下させてえ、谷間に泡を作ってえ……ちゃ
んと綺麗にい……あ、ひゃんっ！」

美夏

「あっ、ご、ごめんね？　お兄ちゃんの乳首とあた
しの乳首が擦れちゃって……変な声が出ちゃった
……」

美夏

「えへへ、ごめんごめんって♪ ついお耳が可愛くって意地悪したくなっちゃった♪ ってお兄ちゃん、今ビクってした時に前掛け落としちゃってるよ?」

美夏

「仕方ないからあたしが拾ってあげる♪ ……って……あっ」

美夏

「わっ、わっ! お兄ちゃんったら……さっきあれだけおまんこにぴゅっぴゅしたのに……また勃起しちゃって……」

美夏

「もう、お兄ちゃんのおちんぽって絶倫さんなのかな? えへへ♪ まったく、手のかかるお兄ちゃんだなあ♪」

美夏

「ん、いいよ♪ あ兄ちゃんのおちんぽが大きく なっちゃったのはあたしのせいだし……責任をもってお兄ちゃんのおちんぽ、ぴゅっぴゅさせてあげる♪」

美夏

「ふああああ♪ お兄ちゃんのおちんぽ、やっぱり大きいねえ♪」

美夏

「すんっ、すんすんっ……はふう……♪ おちんぽ、愛液と精液の香りが混ざって……ああん♪ とってもエッチな匂いだよう♪」

美夏

「それじゃ、お兄ちゃん♪ 今からあたしのお口で、お掃除フェラ♪ してあげるね♪」

美夏

「ああ〜むっ♪ んっ、ちゅっ、ちゅぷっ……
れろれろおっ……ぴちゃっ、ぢゅっ、んぷっ！」

美夏

「れろっ、ちゅぱっ、れろれろれろっ……ん、
どう？ おにいひゃん？ ひもちいい？」

美夏

「んふふっ、おにいひゃんのおひんぽ、とっても濃
くっれ、おいひくてえ……♪ れろっ、れろれ
ろっ！ ちゅぷうっ！」

美夏

「んっ、ぷはっ、おちんぽの先っぽ……段差のそこ
ろに白いのたまっててえ……これってチンカスっ
て言うんだよね？ エッチな本で読んだ事ある……
…」

美夏

「このままにしてちやおちんぽ病気になっちゃうか
もしれないから……ん、じゅっ！ じゅぶぶぶっ
……！ じゅぷっ！ ちゅぱっ！ はあ、はあ……
…チンカスも、しっかり舐めてえ……ん、じゅ
ぷぷっ！ 綺麗にしてあげるね♪」

美夏

「はあむ！ ちゅっ！ ぴちゃぴちゃっ！ んっ、
ぢゅっ、れろっ、れろれろっ……ぢゅぷぷっ、
ちゅっ！ ちゅううううう、ちゅぷっ！」

美夏

「あっ、ひゃんっ♪ おちんぽ暴れちゃだめえ♪
はむっ！ れろっ！ ちゅっ、ちゅぷぷっ、れ
るっ、れろれろれろ……！ じゅりゅ
りゅっ！ じゅぱっ！ はあ、んっ……びくびく
脈打って、とっても気持ちよさそう♪」

美夏

「このまま、もっと奥まで咥えこんで、お口まんこでいっぱいぴゅっぴゅさせてあげるね♪」

美夏

「はぶっ！　じゅぶ、じゅりゅっ……………　ぢゅぶぶっ、んじゅっ！　ちゅっ、ちゅぱっ！　んんっ……………ちゅぶ、ちゅくっ……………　ちゅぶぶっ、ちゅぱ、んちゅ……………　ぴちゅ、くちゅ……………　んん……………　んぶうっ！」

美夏

「んむうっ！　んっ！　ん、んんんっ！！　んぢゅっ！　じゅるじゅるっ……………　じゅぶ、じゅぶぶ……………　れちゅ、れろっ、ぢゅぶ……………　ちゅっ、ちゅぱっ、はあ、ん、ちゅ♪」

美夏

「はあ、はあ……………舌もこうやってえっ……………口の中でれろれろしてえ……………♪　んぢゅっ！　ぢゅっ……………れろっ、れろれろれろっ……………♪　ちゅっ！　ぴちゅっ、んぶぶうっ、じゅぶぶっ、んはああ……………」

美夏

「たくましくてえ、立派なおちんぽお……………ずずっ、れろっ、ちゅはっ……………あうう♪　味濃くってえ♪　チンカスおいしい♪　美味しいよう……………♪」

美夏

「んゝちゅ♪ ぢゅっ！ じゅぶぶっ……！ ん
ぷっ！ んっ！ んっ！ んっ！ んっ！
んっ！ んっ！ んんんっ！ んぶっ！ ぶぶ
ぷっ！ じゅっ！ ちゅっ、れるぶちゅ！ ちゅ
ぷっ、ちゅぱ、んちゅっ……！ ちゅっちゅ…
…！ ちゅぱっ、んちゅ、じゅぶ……！ ちゅ
ぷっ、んぶぶっ……！ ぷはあっ！？」

美夏

「んっ、はあ、はあ……こんなに男らしいおちんぽ
啜えてたら……あたひも、また変な気分になっ
ひやって……おまんこ発情しちゃう……おかしく
なっちゃうよお♪」

美夏

「あむっ♪ んっ！ れりゆる……ちゅっ、れ
ちゅ、ちゅぶぶっ……はむ……ぢゅっ……じゅう
うっ、じゆるるっ、れるっ、れるれるる……！
んゝちゅぶぶ♪」

美夏

「んっ、んむうゝ♪ お兄ちゃんのおひんぽビクビ
クって震えて、もう出ひゃう？ ぴゅっぴゅひ
ひゃうのお？」

美夏

「いいよ、出ひてえ♪ あたしのお口に、お兄ちゃ
んのおちんぽみりゆく、いっぱい出ひてええ♪」

美夏

「んぷっ！ ぷっ！ んぶう！ ちゅぷっ！
ちゅっ！ ちゅぷぷっ……！ ちゅ、ちゅっ！
じゅぶ、じゅりゅりゅ……！ はぷっ、ちゅ、ん
ちゅ、れるっ、ちゅっ、ちゅぷっ！ ちゅぱっ、
んんんんっ……！」

美夏

「お兄ひゃん！ イっれ！ おちんぽぴゅっぴゅ
イっれええ！！ んっ！ んっ、んっ、んぷっ！
ちゅぷっ！ ちゅるちゅるっ！ ちゅぷぷ
ぷっ！ んじゅ！ ちゅっ！ じゅぷっ！ れる
ぷちゅ！ ちゅぱっ、ちゅぷっ、じゅるじゅる
じゅるっ、ちゅっ、ちゅうう、んぶうっ！ ちゅ
ぷぶうううううううううううううううう
っ……！」

美夏

「んっ！ んんんんんんんっ！！！！？？？ ん
むううう！！ んぷはっ！！ んっぶうう
ううううっ……！」

美夏

「あむぶうううっ、んんっ！？ 出でりゅううっ！
お兄ひゃんの、ミルク……どぶどぶっ、てええ
えっ！ んぶうっ……！」

美夏

「んんっ……！ ぶぶううっ！ じゅるっ、じゅりゅ
りゅりゅ……ん、んうううううっ、んむっ、
んっ」

美夏

「んー……んじゅりゅ、じゅぞぞぞ……じゅりゅっ
……ん、んっちゅうううう……♪「くっ
……「くっ……「くっ……「くっ……ぷはあ……
はあ、はあ……ふうううう……んっ……
れろれろっ、ぢゅっ……んちゅっ、ちゅっ……
ちゅぷ♪」

美夏

「え、えへへ♪ お兄ちゃんのおちんぽミルク、全
部飲んじやった♪」

美夏

「んっ、んん……精液まだ喉にからみついてきて……
……「くっ、くっ……すううううう……
……はあああ……♪」

美夏

「はふう♪ お兄ちゃんの香りが全身を巡って……
ああん♪ 体の内からお兄ちゃん色に染まってる
みたいで幸せすぎるよ……♪」

美夏

「あ、お兄ちゃんのおちんぽも小さくなって……え
へへ……♪ 今日は一日お疲れ様だね♪」

美夏

「それじゃ、おちんぽもすっきりして綺麗になっ
たし、外が真っ暗になる前にシャワーで流して帰
ろっか、お兄ちゃん♪」

◆トラック05

美夏

「えへへっ、何だか今日はすっごく大変な一日だっ
たね」

美夏

「朝お兄ちゃんを起こして、お昼休みにはお兄ちゃんに告白して……うう……今思い返しても恥ずかしくなっちゃよう……」

美夏

「でも、そのおかげでお兄ちゃんと両想いになれて、放課後はそのままチャイロデイングの恰好で初エッチして……一緒にシャワー浴びて……」

美夏

「つて、なんだか、改めて思い返してみると、とても付き合って二日目の恋人がするようなことじゃないよね、これ……」

美夏

「すっごくいい勢いで大人の階段踏み越えていっちゃって……あううう……絶対やりすぎたよ……」

美夏

「ん、でも、今までお兄ちゃんへの想いをずっと我慢し続けてきたんだもん……これくらいエッチで淫らになっても仕方ないよね！」

美夏

「だから、これからは今までとは比にならないくらいお兄ちゃんに積極的に迫っちゃうんだから!!」

美夏

「これから先も、ずっと、ずー——っ——と!!」

緒なんだから! 覚悟してよね、お兄ちゃん♪」

◆おまけトラック06 左耳舐めループ

◆おまけトラック07 右耳舐めループ

◆おまけトラック08 両耳舐めループ